

## 06年度 政経AO全訳および解答

川田拓矢先生作成

すでに問題になっているか、いまずぐにも問題になりそうな、何かの環境上の危機に関するめざましい、あるいは不安な記事を目にせず、朝刊を開いたことが一日でもあったらどうか。まずなかつたらどうか。地球温暖化について記事が書かれている日もあれば、人口増大、大気汚染、資源の枯渇、海面の上昇、核廃棄物、あるいは私たちの食物や飲料水に含まれている有害物質について書かれている日もあった。とりわけ気がかりなのは、そういった記事のほとんどに見うけられる『私たちが自然の敵なのだ』という示唆、すなわち、現代の豊かなライフスタイルのほとんどが自然のバランスを乱す原因となっている、という示唆である。たとえば、私たちが都市や空や海を汚染しているとか、私たちが自らを養う天然資源の浪費をしている、といったように。つまり、無思慮で無駄の多い生活様式を変えなければ、地球は私たちや未来の人びとにとって非常に住みにくい場所となるだろう、という警告である。

メディアによるそういう報道は、今日の環境を考える上での主たる特徴である将来に対する暗い展望を反映している。そういう報道の中心テーマは、〈豊かな〉社会というのは〈汚染〉社会であり、それこそ固有の特質なのである——つまり、私たちが豊かになればなるほど、私たちはそれだけ地球の資源を濫費し、いよいよ地球を人間であふれさせ、大切な地球の土地や空気や水をますます汚染する、というものである。こういう観点は明らかに、人間が地球を滅ぼそうとして活躍しはじめないうちは地球は素晴らしい場所であった、という前提に基づいている。

環境論者の中にさえ、地球が将来こういった悲観的な状況に陥ることは確実である、と本気で信じている人がいる。私は、そういう人たちが常に無知であるとか、未熟であるとか、その思いこみの心因が身勝手であるなどと言いたいわけではなく、彼らはじつにマイナス思考の、悲観的な人たちであると言いたいのだ。私は彼らより地球環境の未来に希望を抱いているし、また、私たちの将来に関してかなり楽観的な見解を擁護する証拠がたっぷりあると信じている。

私の見解では、人間は環境の敵ではないし、豊かさも環境の敵ではない。富は必ずしも

環境の質を低下させるものではなく、それどころか〈環境保護の考え方〉を涵養する。人間が豊かになるにつれて、彼らの多くはますます環境の健全さや美しさに敏感になってきている。さらに、富を手に入れることによって、環境を保護し改善する経済的な手段を与える一助ともなる。たしかに、富だけではよりよい環境は保証されないし、社会的な責任感も得られないし、また政治的な決意も得られないが、『豊かさは将来のために住みやすく環境にやさしい環境を保証する上で重大な要因なのである』。

環境の真の敵は〈貧困〉である。すなわち、何十億人もの世界の住民が日々の生活で飢餓や病気や無知に曝されているという惨状である。貧困こそ環境の敵であり、貧者こそ環境の中の犠牲者である。貧しい人びとは常に資源を使い果たし、環境を汚染し、自らの居住場所を仲間ですすめぬ。彼らがそうするのは、環境がどうなろうとかまわないからではなく、生き延びるためにそうすることが必要だからである。彼らは、裕福な人びとが享受している環境のメリットを十分認識している。だが、彼らはまた、そのよりよき環境への道程は遠く、自分たちの喫緊の目標は惨めな貧困の状況から抜け出すことでなければならないということも知っている。

貧者は助力なしではこの長い道程に踏み出すことはできない——物惜しみしない公共機関や、国家や、自国の政府の誠実で効果的な政策による助力なしでは。豊かな国々が後発社会の人びとに手を差し伸べることは、社会的な責任であり、倫理的にあたりまえのことでもある。(しかし、環境がらみの視点から見れば、それは倫理的なものとしてすまされる問題ではない。それは現実的な問題でもある。というのは、富者の利益は貧困を排除することによってもたらされたものだからだ。) 援助してやらなければならないというこの考えは、貧困から湧いて出る人びとは必ず私たちのような〈不経済な〉消費者となり、彼らが〈よい生活〉を求めれば地球の環境被害を増すばかりだと恐怖する人間を悩ませる。そんなふうに恐怖するのはよくわかるが、その推論はまちがっている。たしかに、豊かさを満喫する人びとが消費の趨勢を歓迎して、土地や、車や、コンピューター、携帯電話といったものを所有することに誇りを抱くようになるのは疑問の余地がない。だが、同時に彼らは自分や家族のために、教育、健康、余暇といったものも求めるのである。つまり、『彼らは環境保護主義者になるのである』。

人は環境保護主義者に生まれつつあるのではなく、造り変えられるのである。産業化された国々において、環境保護主義は初期の産業化と経済成長の悪影響に対する反動とし

て生じた。快適な生活様式を得ようと苦闘しながら生き延びる途上で、人びとはいままでよりも重い社会的責任感を身につけ、環境の性質について考える時間と精力を持つようになった。彼らはもろに環境破壊を経験したので、その改善が必要となった。この半世紀の中でも特筆すべき成功は、じつは、すさまじい経済成長の時代に産業化が与えた環境上の悪影響を撥ねかえそうとして、産業社会が成し遂げた素晴らしい進歩である。たとえばアメリカ合衆国では、ここ五十年のいかなる時期よりも空気が浄化され、飲料水から不純物が取り除かれ、食糧供給はいままでより豊富になり安全になった。また、森林地帯はこの三百年で最も繁茂しており、ほとんどの川や湖がふたたび透明度を取り戻した。さらに、主として科学技術の進歩と情報革命のせいで、産業界も建造物も交通機関も、過去のいかなる時代よりもエネルギー利用や資源利用の効率がよくなった。だからといって合衆国の資源や環境の状況がほぼ完璧になったとか、全体として満足のいくものになったというわけではない——もちろんそうではない。さらに多くの要求が満たされねばならない。しかし、環境の改善が顕著であったことは紛れもないのである。そのような改善は、たとえば政府の規制や、税制や、財政刺激、自治体の活動といったさまざまな手段を通じてなされた。最も重要なのは、こういった環境改善の功績を、立法者を動かす努力をする政府や、環境保護団体や、種々の利益集団のみに帰すことはできないということだ。たとえそれらが重要な役割を担ってきたとしてもである。彼らの努力によるばかりでなく、そういう改善は、合衆国市民の大多数やその他すべての豊かな民主主義社会が、清潔で住みやすい環境を要求したからこそ、実現されたのである。

## 問題 1

自ら生み出した産業化社会の悪環境の中で生存のために苦闘する歴史をくりかえす途上で、初めて人間は社会環境の悪化に責任があると認識し、それについて考える時間と精力を獲得するようになったから。

(93 字)

- すぐ後ろに書いてある本文をなぞるだけの易問ではあるが、自分の言葉での表現を主にしなければならない。具体例と理由は十中八九後ろにある。

## 問題 2

- (1) 環境改善の功績は一部の公的な機関ではなく民主主義社会全体の動向に帰すべきだ。

(38 字)

- 要領よく、かつ自分の言葉でまとめることはけっこう難しい。具体的な機関名・団体名等を引用しないこと。

- (2) 一夏尾瀬を歩いたとき、沿道の諸処にゴミを捨てるなど書いてあり、宿泊所では歯磨粉や石鹸の使用が禁止されていた。ここまで念入りに警戒しなければ人間の放縦は野放しになり、環境破壊は免れないのだろうと痛感した。たしかに保護団体の活動の趣はあったが、道行く人も宿泊客も誠実にその趣旨を守り、自然に対してネガティブに働きかける気配はなかった。筆者の言う、公的団体レベルと市民レベルの要求が相まって環境の改善がなされるというのはこのことであろう。人は自らの悪行から学び、悪行が生み出した不都合を改善する方向へ進む、つまり公と私の協調作業によって人間意識の改造が行われるという著者の見解に私は賛を唱える。

(294 字)

- 自分の具体的経験を筆者の主張に食いこませるのに時間がかかるかもしれない。字数はだいたい身近な例に半分、筆者の主張に対する感想に半分。ふだんから問題意識を持っていた学生には解きやすかったかもしれない。

### 問題 3

(1) ○

(2) ○

(3) × 貧困を克服する過程で悪化した環境は、得られた富によって結局は改善されるから。 (38 字)

(4) × 消費の欲求は文化の向上を求め、そのために環境の保全を図るようになるから。 (36 字)

- これまた具体的な羅列を避けることが肝心である。20～60 字あたりの問題は、抽象的に文章をまとめる力が要求される。

### 問題 4

低収入・中収入・高収入者の階級の人口比は第 2 表によると 37%、48%、18%であり、これに対しそのCO<sub>2</sub>の排出比は、同じく第 2 表によるとその順で個人あたりほぼ 5%、20%、75%、また階級的には第 1 表によると年度の推移にほぼ関係なく正比例の直線を描き、おおよそ 8%、42%、50%である。すなわち、地球温暖化の主要原因とされるCO<sub>2</sub>の排出量は中・高収入者総体でその 90%以上を占めることになる。これは中・高収入者による車や冷暖房設備など贅沢品の使用および、それらを製造する第二次産業の工程から排出される二酸化炭素に起因するものと判断される。著者の主張では、貧者は生き延びる必要から資源を濫費して環境を汚染し、富者はその悪行に覚醒して、とりわけアメリカにおいては環境に改善を施すことに概ね成功したと語っているが、こと地球温暖化に関するかぎりその説は信憑性に欠け、正当性は成立しないと言ってよい。

(398 字)

- 表の数値計算が面倒だが、例年単純な読み取りが課されるだけなので、恐れる必要はない。相当な得点源になるだろう。下線部分は、書き加えないと、数値羅列と著者の意見のなぞりだけになって、答案の体裁が整わない大切な箇所である。